

日本の学童ほいく

全国学童保育連絡協議会

普及拡大 ニュース

みんなで読もう！ 目標 3万6000部

子どもを学童保育に通わせる保護者と、子どもたちといっしょに毎日過ごしている指導員が書き手となり、働きながらの子育てを応援し、学童保育の充実の願いをこめてつくられている月刊誌です。みんなで読んで、語って、楽しみながら、よりよい学童保育をつくっていきましょう。

2022年8月5日

元気が出る
みんなの
取り組みを
ご紹介

楽しく普及拡大

仲間を増やそう！
運動の広がりを実感する
新規購読者の拡大！

今の状況を知らせる「ほいく誌」の普及拡大の取り組み！

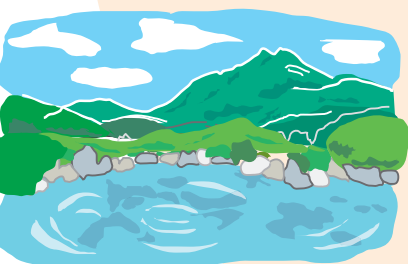
大分県放課後児童クラブ連絡協議会で、ほいく誌普及拡大に向けた取り組みはただ一つ……。年間の活動方針で示した『日本の学童ほいく』の普及拡大に取り組みます」の一文のみ（もちろん、県連協主催の研究集会や各種研修会での紹介を欠かすことはありません）。

少しずつではありますが、県内のほいく誌の購読数は増えています。県の連絡協議会が結成されて9年目。結成前と比較すると購読数はおよそ4倍に達しています（元の数字が低いため少々購読数が増えると、“大幅増加、につながることはおいてください）。大分県連協の活動の根幹をなすのは、「出会い」と「つながり」。そのために学ぶ場を多く設定し、学童保育を取り巻く情勢のいまを知り、出会いと、つながることの大切さを共有することをめざしています。年間を通じて取り組みを継続することで、そのつながりは少しずつ強固になり、共に活動する仲間も結成当初と比べると明らかに増えています。

子どもをまんなかに、学童保育を今よりさらによくするために！

仲間が増えると当然、現状を広く知らせることがこれまで以上にできるようになりました。その際に活用されるのがほいく誌であることにも、多くの仲間が気づきます。実際にほいく誌は、「現場を取り巻くいま」「指導員の実践や思い」等々、自身の実践を振り返り子どもたちを見つめ直せる専門誌として、有効に活用しています。

以上のことから、部数をさらに増やすための重要な一つの取り組みとして、「いまを知らなければいけないと思う“必要、感」、そのための「連絡協議会の思いや取り組みそのものを受けとめる環境の広がり」が運動しなければいけないことがわかってきました。「子どもをまんなかに、学童保育をいまよりさらによくするために」、ほいく誌が持つ意味は大変大きいと思います。これからもいまを知らせる取り組みをさらに強化することが、ほいく誌の購読数増加につながることを意識し、大分県連協として活動を継続していきます。



大分県 の 取り組み

日本の学童ほいく 8月号

特集 共に学び共に歩む

—— みんなでつくる「学童保育連絡協議会」

学童保育連絡協議会は、交流・学習・研究をとおして、学童保育をよりよいものへと発展させるための取り組みを進める組織です。今回の特集では、全国各地の学童保育連絡協議会の取り組みの実際、保護者・指導員の実感を交流することを通じて、連協をめぐる現状や課題、大切にしたいことをあらためてたしかめあいます。



日本の学童ほい・く

みんなで読もう目標 3万6000部

子どもを学童保育に通わせる保護者と、子どもたちといっしょに毎日過ごしている指導員が書き手となり、働きながらの子育てを応援し、学童保育の充実の願いをこめてつくられている月刊誌です。

普及拡大 ニュース

2022年8月5日



コロナ禍の夏 学童保育で楽しんだこと・工夫したこと

神奈川県●指導員から

「つくってあそぼう！ 夏休み工作」と題して、工作を楽しむ機会を複数回、設けました。夏休みに入る前に、12種類の工作を準備し、その材料・道具を一覧表にして各家庭に配布（材料の一部は家庭でも準備してもらいました）。実施日はカレンダーに記入して掲示したうえで、子どもと保護者にどれをつくるか相談してもらいました。参加は各自が自由に判断します。「スタンドグラス」や「折り染め」をきれいに仕上げてうれしそうに持ち帰る子。できあがった「飛行機」や「グローブとボール」「フリスビー」などを持って外遊びに駆けだしていく子、それぞれが、自分のペースで取り組むことができよかったです。

『日本の学童ほい・く』2022年7月号
読者からの投稿より

埼玉県●指導員から

毎年、保護者会行事として行っている「夕涼み会（夏祭り）」。保護者はもちろん、地域の方や、小学校のお友達、学校の先生にも子どもたちが招待状を渡して大にぎわいの行事でした。コロナ禍のため、開催が危ぶまれましたが、「少しでも夏の思い出になるのなら……」と話しあい、規模を縮小して、指導員と子どもたちで「夕涼み会」を行うことにしました。子どもたちもたくさんお手伝いしてくれ、5年生の男の子が「テープでお店までの導線をつくろう！」と床にガムテープで矢印を示し、お店に並ぶ線を間隔をあけて貼ってくれました。以前のように大にぎわいとまではいきませんでした。子どもたちの笑顔は前と変わらず、楽しい時間をおくることができました。こんななかだからこそ、できることを見つけて、動きだしていくことが大事だと確認できた行事にもなりました。

『日本の学童ほい・く』2022年7月号
読者からの投稿より



私が指導員になって約20年経ちました。その間、私事で辞めていた時期があります。それでも戻ってきたのは、この仕事の楽しさ、おもしろさ（つらいこともあります）を思い出したからです。また、いい仲間にも恵まれたと思っています。

戻ってから、子どもたちとうまくいかない、一生懸命やっているのに通じないという時期がありました。仲間にも相談したりしました。そういうとき、頼りになったのが『日本の学童ほい・く』です。指導員の悩みやこうやったら心を開いてくれたよという事例が必ず載っています。“ドンピシャ同じ”というわけではないけれど、内容のなかからヒントをすくい取り、少しずつ自分にあてはめていきました。あとは“子どもたちを信じて待つ”ということをして乗りきりました。

今、コロナ禍にあって、おやつなど個包装ばかりで、子どもたちも残しがちなのでこまっていました。消毒などについては市から指導の用紙が配布されていましたが、おやつを少し手づくりしたいけれど感染のリスクがあるのかと悩んでいました。そんなとき、『日本の学童ほい・く』2021年11月号の特集「たのしく食べる おいしく食べる♪」がありました。みんなも悩んでいるんだなあとわかった安心感と、消毒や基本的対策を守れば少しくらい手づくりも大丈夫と理解しました。

また最近思うのは、だんだんと子どもたちに自分たちの理想を押しつけていないかということです。遊びのなかで少しのことで注意したり、感染についてピリピリしたりしています。もっと子どもたちの意見を聞きながら……。そのためにはこうしたらいいねとアドバイスできる指導員でありたいと思い、これからも勉強しつづけていきたいです。

私と「ほい・く」誌

読者リレー執筆・今月は富山県富山市から
指導員の布村登実子さん

